

2009年度 人間福祉学部報

■ 社会福祉学科



社会福祉学科も今年度で2年目を迎え、当然のことですが昨年新入生としてこの学部・学科へ入学してきた学生たちも上級生となりました。そして「元気、明るい、にぎやか、活発」という印象が強かった皆さんも、すっかり？先輩らしくなりました。

それでは、昨年度にならって今年度も基礎演習担当者から新入生の様子を紹介していただきます。

【基礎演習教員コメント】(50音順)

今年の基礎演習は、昨年と同様、高齢、障害、児童等のテーマ別に分かれ、それぞれのグループでの学習の成果をパワーポイントで発表しました。グループ学習では、資料や文献を探したり、発表テーマの詳細を設定する中で、様々な課題や難題に直面することもありましたが、それがかえって問題の洞察を深めるきっかけとなり、非常に充実した学習であったと思います。プレゼンテーションを聞いていて、学生1人ひとりが成長している姿を見ることができ、うれしく思いました。

(石川ゼミ)

今年のクラスは少ない人数での授業でしたが、皆で支えあうことのできる温かい雰囲気のクラスでした。課題にもよくこたえ、まじめに取り組む姿勢が印象的でした。当初は高校生モードから抜けきれず、大学生活にも不安いっぱいだった皆さんが春学期の終わるころには見事に自分の居場所を見つけ、輝いている様子を見て安心していきます。これからも充実した学生生活が送れるようにと祈っています。

(今井ゼミ)

皆がそれぞれの個性をさまざまな障害も含めて大事にして、共に課題に取り組んでいくことの大切さと「当たり前」を学ぶことができ、嬉しかったです。また、はじめは自分の意見を発表することに不慣れでしたが、大学で学ぶことの楽しさを徐々に感じ取ってくれたように思います。

(小西ゼミ)

ゼミのテーマは「今を考える：大学での学び」。大学での学びを豊かにするために、旬の話題を自由に討論しながら、自発的に考え、表現すること、そして他者の表現を傾聴し、理解することが目的

です。筋書き（詳細なシラバス）をあえて用意せず、シラバスは皆さんと一緒に創り上げようと考えました。「学士力」というやや堅いテーマから始まり、「婚活」といった流行の現象まで、皆さんからいろいろな旬の話題が出てきました。ディスカッションをし、疑問はインターネットや図書館で調べ、まとめたものを他者にわかるように表現することを少しずつ学べたのではないかと思います。（芝野ゼミ）

2009年度の基礎演習は、昨年の教訓を活かして、スタディ・スキルよりも、グループワークに重点をおきました。結果は大成功で、私自身も大変楽しく授業ができました。これは私が用意したプログラムが適切だったというだけでなく、クラスのメンバーの組み合わせもよかったのだと思います。基礎演習は、クラスのメンバーの「相性」にもかなり左右される気がします。（杉野ゼミ）

多文化ワークショップを通して新しいクラスメートとの絆を深めるとともに、お互いの共通点や相違点に気づき、私たちのコミュニティが実際に多文化であることを発見する機会になったことと思います。また、学生たちの興味がある課題について調べて、クラスで発表するグループワークを行いました。社会福祉の課題やソーシャルワーカーの資格などについて皆本学部で学ぶ意義を少しでも見出したかと思えます。（陳ゼミ）

基礎演習では、多様な背景の新入生が初めて顔を合わせることから、最初はどこかぎこちない印象でした。キャンパス散歩、図書館オリエンテーションなどを経て、グループでディベートの準備をする頃からは、資料を調べたり、人前で意見を述べたりする経験を重ね、徐々に大学生活にもなじむ様子が見え始めました。その後廊下ですれ違うとき、軽く会釈してくれる学生に会うと、とてもうれしい気持ちになります。（前橋ゼミ）

基礎演習では、グループに分かれて、グループでテーマを決めて、資料を調べて、まとめて、発表するというのをやりました。授業を重ねる毎に、皆、プレゼンテーションの技術、ディスカッ

ション力、調べる力、レジュメにまとめる力などが養われていき、頼もしく、うれしく思いました。（三毛ゼミ）

【その他の1年生科目担当者コメント】

ソーシャルワーク論A

本講義は「ソーシャルワークとは何か」についてその基礎を学ぶ講義科目で、6人の専任教員が交代で講義するオムニバス形式でした。内容は、目的・理念・歴史・範囲やそこに携わる専門職についても触れられました。カウンセリングなどと比べてソーシャルワークの内容が認知されておらず、また一言で説明しにくい専門分野ですが、受講生の皆さんははじめて聞く専門用語も多い中で積極的に学ぶ姿勢が表れていたと思います。2年生になると本格的に専門科目を履修していくこととなります。1年生での学びを土台にしてさらに専門知識を深めていって欲しいと思います。

（松岡）

「ソーシャルワーク実習指導Ⅰ」

本科目は、ソーシャルワーク実習指導の第1段階として、見学実習を通じて実際に実習を行う施設・事業者・機関・団体・地域社会等に触れ、基本的な知識とともに現場のイメージをもつと同時に、合宿での体験学習を通じて実習に必要なソーシャルワーカーとしての基本的価値や態度について学ぶことを目的とした授業展開をしています。今年度は10月3日・4日に千刈キャンプに1泊2日の合宿を実施し、110名全員の学生が出席しました。様々な屋内外のワークを通じて自己を見つめ、学生同士の横のつながりを育み、またサポートしてくれた先輩からは実習前後の話を聞くことができ、将来を見据えた学びを深めることができました。一方、見学実習は施設・機関の現場をまわり、その内容とそこでの気づきを実習日誌の簡易版の「記録」に書き込み、その後の振り返り会に出席し、現場と実習をよりイメージしやすい学習となっています。

それから全員についての基礎演習のような共通科目がない2年生についても貴重な紹介をいただいています。

（池埜、石川、大和、小西、川島、高杉、中島）

「社会福祉援助技術演習」

社会福祉士養成課程の演習の第2段階という位置づけのこのクラスは、春学期から様々なワークを取り入れ、また夏休みにはグループでのフィールドワークをしていくアクティブな授業展開が特徴です。今年度の中島クラスは、2年生が3分の2、3年生（社会学部社会福祉学科生）が3分の1、そして人間科学科の学生さんが加わって、バランス感覚の楽しめる構成でした。何よりもワークへの積極的な取り組み方やそこでのディスカッションの深まりにそれを感じます。また、今年度は、同時限開講クラスの学生さんとの合同授業も試み、秋学期には児童養護促進協会の「里親出前講座」と称した、里親さんと関学の先輩で長年里

親さんのコーディネートをされてきたソーシャルワーカーのお話を聴く機会に恵まれました。ソーシャルワークマインドと視点を養うべく向き合う日々です。
(中島)

以上、2009年度の社会福祉学科の学生たちの様子を先生方の授業の印象をもとに紹介させていただきました。来年度はまた新たな新入生が入ってきます。きっと現在の1年生・2年生は上級生として成長した一面を見せてくれることと思います。今回、コメント記事には登場されていらっしゃらない室田先生という素敵な先生も含め、15名の教員一同、その姿を見るのを楽しみにしています。

■ 社会起業学科



2009年度の社会起業学科は、68名の2期生と3名の専任教員（神野教授、川村准教授、孫准教授）を迎え、スタートしました。

春学期には昨年度に続き世界各地で活躍する社会起業家たちを招き、全3回に渡り連続公開講座「世界を変える社会起業家たち2009」を開催しました。詳細は下記の通りです。

●第1回 4月16日（木）

講師：村田早耶香 氏（NPO法人かものはしプロジェクト共同代表）

テーマ：「カンボジアの子ども達の笑顔のために～27歳女性が社会起業で児童買春問題に挑む～」

- 第2回 5月7日(木)
講師：マリー・ソー氏
(Ventures in Development 共同創設者)
テーマ：「ソーシャル・イノベーション」
- 第3回 6月11日(木)
講師：溝畑 宏氏
(株式会社大分フットボールクラブ
(大分トリニータ) 代表取締役)
テーマ：「ゼロから夢の実現に向けて」

これらの他にも、社会起業学科主催あるいは後援として以下のようなイベントを学生および一般の方々に提供しました。

- 5月28日(木)
社会起業学科主催国際協力ワークショップ
テーマ：海外からの JICA 研修生による異文化理解と国際協力ーエイズと国際協力ー
ファシリテーター：青木理恵子氏
(NPO 法人 CHARM 事務局長)
榎本てる子氏
(本学神学部准教授)
ゲストスピーカー：JICA 研修「HIV/AIDS の診断・予防・対策モデルコース」に参加中の研修生たち
- 5月26日(火)
NPO で社会を変える！社会変革助成財団・タイズ財団の経験から学ぶ
セッション1：社会変革 NPO 支援の資金をどう集めるか？
講師：ドラモンド・パイク氏
(タイズ財団創設者・CEO)
コメンテーター等：今田 忠氏
(市民社会研究所所長、前日本 NPO 学会会長)
釣島平三郎氏
(太成学院大学経営学部教授)
セッション2：社会変革 NPO をどう支援するか？
講師：ドラモンド・パイク氏(同上)
コメンテーター等：吉富志津代氏
(たかとりコミュニティセンター理事)
野崎隆一氏
(神戸まちづくり研究所理事・事務局長)

- 7月10日(金)
社会起業学科共催講演会「女性や子どもの人身売買をなくすために」
テーマ：「女性や子どもの人身売買をなくすために：世界の取り組み、日本の取り組み」
講師：Dr. Mark Lagon 氏
(ポラリスプロジェクト米国本部事務局長)

- 7月12日(日)
社会起業支援サミット2009 in 兵庫
第一部：社会起業家によるプレゼンテーション
第二部：社会起業家とのワークショップ

- 10月22日(木)
社会起業学科主催公開講演会
テーマ：「森とエイズとシアバター～出会いをつなぐ起業～」
講師：森重裕子氏
(株式会社ア・ダンセ代表取締役)

- 11月10日(火)
特別講義「私たちにできる国際協力・支援とは～途上国での生活と仕事からみる国際協力」
テーマ：「私たちにできる国際協力・支援とは～途上国での生活と仕事からみる国際協力」
講師：細川幸成氏
(独立行政法人国際協力機構 (JICA) 兵庫国際センター)

5月には社会起業学科独自のプログラムである、英語短期留学にて12名がカナダのクィーンズ大学に留学しました。出発直前に新型インフルエンザに関する情報が錯綜し、プログラムの実施が心配されましたが、無事に全プログラムを終了することができ、8月に12名全員が元気に帰国することができました。また、11月に英語短期留学参加者による報告会を G 号館326号教室で実施しました。7月には社会起業学科の学生を中心に結成された学生団体「KG-TANK」のメンバーが、東京で開催された「SIFE Japan 国内大会2009」に出場しました。SIFE は、次世代のビジネスリー

ダー育成を目的とした大学生の教育プログラムで、国内大会は2005年から開催されています。「KG-TANK」はプロジェクトチーム「CASA」を作り、滞日外国人女性の就労支援を目指し、4人の女性たちと一緒にキャンパス内でアジア料理のカフェをオープンするなどの活動をしてきました。「KG-TANK」は見事優勝を成し遂げ、10月に開催されるドイツ（ベルリン）での世界大会に日本代表として出場しました。世界大会では優勝することはできませんでしたが、素晴らしい経験を積むことができましたと思います。また、本人たちだけでなく、他の社会起業学科の学生、教員にとっても大きな刺激、自信になったものと思います。

10月には、学生の学ぶ意欲と学科への求心力の向上、社会起業という新しい分野への関心を高めることなどを目的に2年生を対象に学科懇親会を

開催しました。来年度から始まる研究演習の選択時期ということもあり、社会起業学科での学びや研究演習の内容といったさまざまな話題で盛り上がり、有意義なひと時を過ごすことができました。また、12月には、1年生を対象にした学科懇親会も開催されました。1年生と学科教員以外に、宗教主事や言語教育の教員も参加して楽しく交流することにより、学生の学科に対する帰属意識や学ぶ意欲が高まったと思います。

さらに、2010年1月29日（金）、30日（土）の2日間、関西学院千刈キャンプ場にて、1、2年生合同での合宿を実施しました。社会起業学科に愛着を感じてもらい、全体として勢いを出していくためにも「学ぶ」「食べる」「語らう」などのすべての要素がある2日間でした。

■ 人間科学科



人間科学科は2009年4月2日の関西学院大学入学式に、女子54名、男子70名、計124名の新生入生を第2期生として迎えることができました。昨年と同じく学部宣誓式から新生入生にとって人間福祉学部ならびに人間科学科における実質的なスタートとなりました。4月3日から、履修指導、学科オリエンテーションが開催されました。特に学科

オリエンテーションでは各教員の自己紹介が研究の専門性を中心に説明され、学習への動機付けを強く促進する内容となりました。本年度の新生入生の入試形態も昨年度同様多岐にわたり、多くの可能性を秘めた第2期生であるといえます。

2009年度は前年度の経験を踏まえいくつかの新たな施策をカリキュラム上展開することになりま

した。代表として人間科学入門においての試みがあげられます。人間科学入門は人間科学科学生の必修科目ですが、この科目に「佐藤君の人生」という副題を付け、佐藤君という架空の人物の一生を創作し、この人生劇場に各教員の専門性を当てはめ、講義を展開するという教授方法を採用しました。複数がオムニバス形式で担当する科目は担当コマ間ごとの連続性に弱点があると考えられます。しかし、この「物語」法はこの弱点を補完し、ストーリー性を重視することにより学生の皆さんが人間科学という複合領域への興味を惹起し、更なる学習意欲の向上を図ることができるという判断のもとに企画されたものです。学生による授業評価、レポートから推定すると学生の反応も概ね良好であったといえます。また、「読書は知的探究の第一歩」という理念のもと、人間科学科所属教員が人間科学科学生に「これは読んで欲しい」という書籍を10冊程度紹介して「人間科学の100冊」として指定し、人間福祉学部資料室ならびに実践教育支援室に配架、コーナーを設置していただくことになりました。学生がこのコーナーをより多く利用してくれるよう教員一同、切に願っていることを付記します。

5月29、30日の両日、甲山自然の家において人間科学科合宿キャンプを実施しました。このキャンプは一泊の合宿形式で行われ、対象は2年生、目的は学科内の学生内親睦、教員との交流、研究演習選択への道標であり、特に研究演習選択の道標に重点が置かれたスケジュールとなりました。一日目は本学から甲山自然の家までのハイキングを兼ねた移動があり、オリエンテーション、食事会兼親睦会が行われ、親睦会では、学生が教員と共にジュース片手に学問や人生の話に花を咲かせていました。翌日は、予定になかった甲山登山、そしてメインテーマであるゼミ選択の道標を各教員がおこないました。学生は自身が興味をもつ分野を担当する教員の待機する部屋に時間割に添ったかたちで出向き説明をうけ、研究演習に関する質疑応答をおこないました。合宿形式という学科行事は多くの成果を得ることができたことには言を待たないことは明白です。9月末からはじまった研究演習選択は人間科学科初めての経験にもかかわらず大きな混乱もなく、11月末までには2010年度研究演習の学生配置がほぼ固まりました。こ

れも人間科学科の人的交流を促進した、合宿キャンプのひとつの成果であるといえるかもしれません。

10月17日には総合体育館において人間科学科主催スポーツ大会を開催しました。参加学生は当初予想していたより少なくなりました。これは、学科の特性上、体育会、文化系などの諸団体に所属する学生が多く、シーズンまっただ中であるこの時期でのスポーツ大会への参加が難しかったためであると考えられます。しかし、試合に参加した学生は学生対抗、教員チームとの対戦と熱戦をくりひろげ、若者らしい歓声、すがすがしい汗をながしていました。今回のスポーツ大会に関してはいくつかの課題が挙げられましたが、他学部において学部活性化の有効なツールとしてスポーツ活動が機能しており、今後のこの種の行事展開にいくつかの示唆を得られたこともスポーツ大会実行の成果となったといえます。

12月19日は人間科学科主催の「日本伝講道館投の形講習会」が佐藤先生の指導のもと開かれました。この講習会は兵庫県柔道連盟と協力し、「武道」を履修し単位を取得した学生には、講道館が規定する修業年限に見合う補講をおこなうことで初段を認定する制度のもとにおこなわれたものです。主に保健体育教員を目指す学生が対象となります。中学校、高等学校の保健体育カリキュラムの中で武道が必修化されることは決定されています。このような社会情勢の中で教職希望学生に初段取得の機会を提供することは学科の就職対策としても有効であると考えられます。

以上が人間科学科の全体の2009年度の報告になります。このほかにもアンベッケン先生がスウェーデンから共同研究者を招かれたり、藤井先生が中心となった死生学など、研究活動も盛んにおこなわれています。

学生の中には正課外活動で成果を上げ関西学院大学の名声向上に寄与している学生も多くいます。そして、2010年度は先ほどから述べておりますように大学教育の根幹にあたる「研究演習」がスタートします。学科設立の理念が成就するかは来年度の成否にあるといっても過言ではありません。

今後とも、人間科学科らしく学生・教員の良い緊張感のもと、学生の皆さんが多くの分野で多くの成果をあげることが出来るようにがんばって欲しいと願ってやみません。

■ 言語教育

必修外国語科目の英語講読では、流暢さの向上と素早く的確に情報を読み取る能力の強化をめざし、副読本の多読課題を出しています。資料室に数百冊の副読本を準備し、学生各自が能力に応じた難易度のものを選び、2～3週に一冊、各学期最低5冊を読むことを課しています。読後には理解を確認するための問題を解きます。2009年度には大量の副読本が補充されました。

第2言語の英語コミュニケーションの授業では大学共同研究の助成金（研究代表：中野陽子准教授）を得て英語による異文化間コミュニケーション能力を伸ばし、学習意欲をさらに高めるための新しい試みを行っています。春学期には、Eucharis Donnery 英語常勤講師担当のクラスで①Webカメラを使ったTunku Abdul Rahman

University（マレーシア、山口登志子先生）とのリアルタイム交流授業（写真下左）、②主にアメリカからの交換留学生との英語による交流（写真上右）、③ゲストスピーカーによるミニレクチャー（写真上左と下右）を行いました。秋学期にはさまざまな国の交換留学生との交流を取り入れた授業を行いました。この結果は研究報告として学会などで発表される予定です。

この他に、人間福祉学部では、必修科目の英語表現、第2言語として英語コミュニケーション、フランス語、ドイツ語、中国語、朝鮮語、スペイン語、日本手話を開講しています。また、外国人留学生用に、日本語I（必修科目）、基礎英語（選択科目）を開講しています。



■ 文部科学省大学教育推進プログラムに採択

社会起業家養成の革新的教育プログラム開発

～基礎－専門－実践－応用教育を通じたウェルビーイングに寄与する社会起業能力の育成～

2009年度から3年間予定の学部教育プログラムとして、社会起業学科の取組が本年度の「大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム」に採択されました。内容は、関西学院大学のスクール・モットーである「マスター・フォア・サービス」を具体化する取組として学生たちの社会貢献を組織化し運営できる能力を「社会起業能力」として位置づけるものです。社会的に脆弱な立場にある人びとの社会的排除という社会問題を当事者の社会参加を基本に多くの市民や学生たちのボランティア活動や寄付・寄贈の支援活動などにビジネス手法を用いて学生たちが自ら起業・経営する能力開発のプログラムです。

本学部社会起業学科は、講義形式の科目のみならず演習など少人数教育を多く取り入れ、また、フィールドワークやインターンシップなどを体系的に正課に取り入れたカリキュラムを編成しています。基礎から専門、実践教育までの学習保障を展開中ですが、社会人入学も含め経験豊かな学生や問題意識の高い学生にとっては正課といえども物足りなさを感じているのかもしれませんが。そこで我われは、「起業プラクティス」なる革新的モデル科目を立ち上げ応用教育として実験開拓的に試みよう企画しました。

「起業プラクティス」がこのプログラムのキー・コンセプトになっています。当面は正課外の任意科目（授業）となりますが、これに登録してくれる学生たちが社会問題解決や社会貢献のイベント

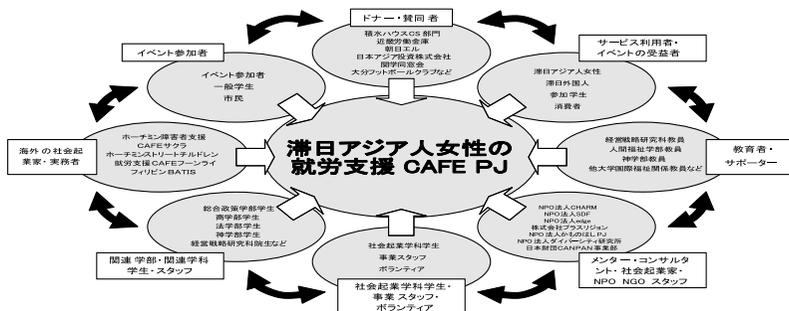
や事業を企画から実施、拡充まで関わる場合、社会起業学科の教員を核にした支援チームを組織し、人間福祉学部内に置かれた「社会起業サポートセンター」が後方支援的なオフィス機能を遂行します。このオフィスにはボランティア学生スタッフだけでなく社会起業学科専任教員や任期制の教職員からなる常駐スタッフを配置し、学生たちの起業に関わる相談から支援にわたるメンタリングなどの業務に当たる予定です。

「起業プラクティス」のサブカテゴリーとして、いくつかのイベント、実験店舗、学外事業などのサブプログラムを学生の自主企画のもとに操業していきます。具体例としては滞日外国人のための社会参加促進のためのコミュニティ・レストラン、難民支援のためのフェアトレード、障害者・若者支援のソーシャルファーム（仕事場づくり）、地産地消のエコロジカルな地域活性化事業などに活動・事業内容は分かれていくでしょう。

また、この教育プログラムを運営するための企画支援や広報活動、渉外活動などにも有志の学生スタッフを組織して教職員と学生が一体となって取り組んでいく予定です。HP、ブログなどの管理運営、ニュースレターやポスター制作、フォーラムやワークショップ企画運営、活動アルバムや記録DVD、報告書の作成などワクワクするような思い出の詰まった大学生活を関西学院大学キャンパスという舞台上でプロデュースしていきます。

(牧里毎治)

応用教育(起業プラクティス)の一例



学生の独自事業をサポートする体制(社会起業フレンズ)

■ チャペル

日時	担当者	主題（奨励題）
4月6日(月)	嶺重 淑 (宗教主事)	チャペルオリエンテーション
8日(水)	ハンドベルクワイア	チャペルオリエンテーション
10日(金)	嶺重 淑 (宗教主事)	チャペルオリエンテーション
13日(月)	広瀬康夫 (吉岡記念館職員)	讃美歌練習①
15日(水)	嶺重 淑 (宗教主事)	「地の塩として歩む」
17日(金)	広瀬康夫 (吉岡記念館職員)	讃美歌練習②
20日(月)	上田直宏 (神学部M2)	「共に喜び泣く」
22日(水)	ルース M. グルーベル (院長)	「“Mastery for Service”を体現する人」
24日(金)	混声合唱団エゴラド	音楽チャペル
27日(月)	聖歌隊	讃美歌練習③
29日(水)	田淵 結 (宗教総主事)	Kwansei Gakuin 2009
5月1日(金)	藤井美和 (人間科学科教員)	「死を超える愛」
8日(金)	エルス・マリー アンベッケン (人間科学科教員)	「マイ・ストーリーとヒズ・ストーリー」
11日(月)	小西砂千夫 (社会起業学科教員)	「経済危機に瀕して我々はどう変わるか」
12日(火)	大学合同チャペル (第1日) に合流	総主題：建学の精神
13日(水)	大学合同チャペル (第2日) に合流	
15日(金)	上ヶ原ハビタット	春の活動報告
25日(月)	石川久展 (社会福祉学科教員)	大切なこと①「大切なこと：ことば」
27日(水)	上ヶ原フィルハーモニック	音楽チャペル
29日(金)	中塘二三生 (人間科学科教員)	大切なこと②「一緒に研究を行った友人」
6月1日(月)	小西加保留 (社会福祉学科教員)	大切なこと③「『いいこと探し』から社会福祉へ」
3日(水)	永田雄次郎 (文学部教授)	大切なこと④
4日(金)	学部合同チャペルに合流	
8日(月)	山内一郎 (元院長・理事長)	「Master of yourself」
10日(水)	嶺重 淑 (宗教主事)	テゼ共同体の歌
12日(金)	藤川 義 (人間科学科1年)	「いのちを使う」
15日(月)	聖歌隊	春の音楽チャペル
17日(水)	グリーンクラブ	音楽チャペル
19日(金)	才村 純 (人間科学科教員)	大切なこと⑤
22日(月)	池埜 聡 (社会福祉学科教員)	大切なこと⑥
24日(水)	バロックアンサンブル	春の音楽チャペル
26日(金)	ゴスペルクワイア	春の音楽チャペル
29日(月)	川島恵美 (社会福祉学科教員)	大切なこと⑦「ゆらぐことのできる力」
7月1日(水)	嶺重 淑 (宗教主事)	大切なこと⑧「与えられている時間」
3日(金)	ハンドベルクワイア	春の音楽チャペル
6日(月)	徳田真二 (吉岡記念館課長)	大切なこと⑨
8日(水)	何玲玲、塩月裕紀代 (社会起業学科1年)	大切なこと⑩
10日(金)	木原桂二 (元宝塚バプテスト教会牧師)	「真実の言葉に生きる」
13日(月)	Big Street (スウェーデン・ストリートバンドプロジェクト)	音楽チャペル
15日(水)	芝野松次郎 (学部長)	「出会いの不思議」
9月21日(月)	嶺重 淑 (宗教主事)	「新学期を迎えて」
25日(金)	坂口幸弘 (人間科学科教員)	「学ぶという能力」
28日(月)	創立記念学部合同チャペルに合流	
30日(水)	山 泰幸 (人間科学科教員)	「親友について」

日時	担当者	主題（奨励題）
10月2日(金)	住野公平（人間福祉学部事務室職員）	「私」と出会う旅
5日(月)	窪寺俊之（聖学院大学大学院教授）	「私達の希望」
7日(水)	聖歌隊	秋の音楽チャペル
9日(金)	福居誠二（人間福祉学部教員）	異文化と私①「ネパールで考えたこと」
12日(月)	辻学（広島大学大学院教授）	「子供をどう見るか」
14日(水)	孫良（社会起業学科教員）	異文化と私②「私の体験から」
15日(木)	大学合同チャペル（第1日）に合流	総主題：多様性を喜ぶ
16日(金)	大学合同チャペル（第2日）に合流	
19日(月)	村上陽子（人間福祉学部教員）	異文化と私③「コロンビアに暮らして」
21日(水)	駒木亮（奄美大島・名瀬教会牧師）	異文化と私④「この小さな者の一人にしたのは」
23日(金)	エルス・マリー アンベッケン（人間科学科教員）	異文化と私⑤「Who Is 外人？」
26日(月)	ゴスペルクワイア	秋の音楽チャペル
28日(水)	山本隆（社会起業学科教員）	異文化と私⑥
30日(金)	上ヶ原ハビタット	活動報告
11月6日(金)	バロックアンサンブル	秋の音楽チャペル
9日(月)	嶺重 淑（宗教主事）	異文化と私⑦「スイスで学んだこと①」
11日(水)	広瀬康夫（吉岡記念館職員）	音楽チャペル
13日(金)	嶺重 淑（宗教主事）	異文化と私⑧「スイスで学んだこと②」
16日(月)	ハンドベルクワイア	秋の音楽チャペル
18日(水)	溝畑 潤（人間科学科教員）	異文化と私⑨「私の留学体験について」
20日(金)	迫間亮(人科2年)、中塚瞳子(社福2年)、袖かおり(起業2年)	「クリスチャンとは？」
25日(水)	中野陽子（人間福祉学部教員）	異文化と私⑩「留学を通して感じたこと」
27日(金)	学部合同アドベントチャペルに合流	
30日(月)	嶺重 淑（宗教主事）	「アドベントを覚えて」
12月2日(水)	嶺重 淑（宗教主事）	讃美歌練習（クリスマスの讃美歌）
4日(金)	宗教総部献血実行委員会	「冬の献血週間を覚えて」
7日(月)	大学合同クリスマスチャペルに合流	
9日(水)	平林孝裕（神学部教員）	「アメイジング・グレイス」
11日(金)	川村暁雄（社会起業学科教員）	「異文化理解から多様性へ」
14日(月)	樋口 進（宗教センター宗教主事）	「希望をもって」
16日(水)	久保智章（社会学部4年）	オルガンによる音楽チャペル
18日(金)	嶺重 淑（宗教主事）	「もう一人の博士」
21日(月)	人間福祉学部クリスマス（*次頁参照）	
23日(水)	嶺重 淑（宗教主事）	「静かなクリスマス」
1月6日(水)	嶺重 淑（宗教主事）	「新しい年を迎えて」
8日(金)	芝野松次郎（学部長）	「出会いを振り返る」
13日(水)	学部合同震災チャペルに合流	於：中央講堂

* 5月18日(月)、20日(水)、22日(金)は、新型インフルエンザに関わる全学休校のため中止

上記のように、今年度は、春学期40回、秋学期41回、計81回（合同チャペルを含む）のチャペルを実施した。昨年度に比べ、出席者も増え、特に音楽チャペルには多数の出席者が見られた。奨励の多くは学部教員が担当し、春学期は「大切なこと」、秋学期は「異文化と私」とい

う共通テーマのもとで奨励していただいた。また、今年度のクリスマスチャペルは、祝会を含めた新しい形で実施した(次頁参照)。来年度は、今年度の反省を踏まえ、さらに充実したチャペルプログラムを提供できるよう努めていきたい。

クリスマスチャペル



開設2年目の人間福祉学部クリスマスチャペルは、通常のチャペルアワーの時間帯（10：35～11：05）ではなく夕刻に開催し、第一部のクリスマス礼拝（17：10～18：10）と第二部のクリスマス祝会（18：30～19：30）の二部構成で行った。

第一部のクリスマス礼拝は、厳粛な雰囲気の中かで守られ、溝畑直子さんに独唱を、神学部自治会のメンバーに降誕劇の上演をしていただいた。第二部のクリスマス祝会は会場をG号館2階ラウンジに移して行われ、学部の学生、教職員がともに集い、軽食をともにいただきながら、弦楽四重奏、アンサンブル、合唱等の演奏を聞いたり、プレゼントに興じたりしながら、楽しいひとときを過ごすことができた。

参加者は、第一部の礼拝が約60名、第二部の祝会が100名強で、特に礼拝の開催時間が学部一年生の大半が履修する授業と重なったため、学部生の出席が全体的に少なかったことが残念であった。来年は今回の反省点を踏まえて、開催日程やプログラム内容等を再検討し、より親しみやすいものになるように工夫していきたい。（嶺重 淑）

■ Dean's Brown Bag

学生と学部教員との親睦を図るため、次のとおりランチ・ミーティングを実施しました。

①第3回

日 時：2009年7月1日（水）12：45～13：25

場 所：G号館3階共同研究室

②第4回

日 時：2009年10月28日（水）12：45～13：25

場 所：G号館3階共同研究室

Dean's Brown Bag

夏休み前の7月1日、そして秋も深まりかけた10月28日の2回にわたり、人間福祉学部の“Dean's Brown Bag”を開催しました。多くの学生のみなさんや先生方が参加してくださいました。事務室のみなさんには、パンフレットの作成、会場の設定、後片付けなど、大変お世話になりました。嬉しいことに、今年度からは飲み物も用意していただき、場の雰囲気をいっそう盛り上げていただいています。

しかし、まだまだ学生さんたちの中には、「え、“Dean's Brown Bag”てなに？そんなのやってんの？」という人も多いことでしょう。そこで、そもそも“brown bag”とは何なのか、そして“Dean's Brown Bag”の目的、あるいは狙いは何処にあるのかといったことについて少しお話をしたいと思います。

まず、“dean”とは学部長のことですね。今この文章を書いている本人が、現在のみなさんの学部長です。



そして、“brown bag”です。文字通り訳すと「茶色の袋」ということになります。日本の文化の中で育った大方のみなさんにとっては、文字通りの

意味で、それ以外に共有する特別な意味はないと思います。留学生や海外帰国学生のみなさんの中には、ピンと来る人もいるかもしれません。



私は、7年ほどアメリカで学生時代を過ごしました。学生といっても専門職大学院の学生で、後半の2、3年は Teaching Assistant や Research Assistant をしていました。そのため学生の立場を離れたいろいろな集まりに参加することが学部 of 学生よりは多かったかと思います。そうした集まりはお昼の時間が多く、お弁当(?) 持参の集まりでした。アメリカの人たちのお弁当は大変質素なもので、いつしか私もそれに慣れてしまいました。だいたい手製のサンドイッチと飲み物、そしてリンゴやバナナといった果物が一品といった感じです。缶詰のスープが加わることもあります。サンドイッチといっても実に簡単です。私なんかは前日スーパーやデリカテッセンなどで買ったレタスやハムなどをライ麦などのパンにはさんで終わりです。時にはレタスを省略することすらありました。これを茶色の紙袋に詰めて持参するのです。この茶色の袋が件の“brown bag”なのです。袋に名前を書いておけば、夏場など会場にある冷蔵庫の中に入れておいても間違われることはありません。これで茶色の袋の意味はわかりましたでしょうか。アメリカなどでは茶色の袋を見るとほとんどの人がランチ(お弁当)を思い浮かべるのではないのでしょうか。

さて、この“brown bag”を持ち寄ってのランチには、少し特殊な意味づけがされるようになりました。TA や RA の集まり、あるいは実習先での昼食時には、この“brown bag”を持ち寄り、それを広げながら世間話に花が咲くのは当然の成り行きです。時には愚痴も出ます。ちょっと議論になったりすることもあります。いろいろな情報が共有される機会でもあります。“brown

bag lunch”は、大切な社交の場であり、情報交換の場であり、息抜きの場なのです。それで、グループの中で情報の交換が十分ではなくなり、関係がぎくしゃくしてきたときには、“brown bag lunch”が呼びかけられるようになったのですね。ちょっと「ガス抜き」が必要な時、あるいは日本流にいうとちょっとした「根回し」が予め必要な時などに“brown bag lunch”が利用されるのです。

新しい人間福祉学部で、わたしは学部長として、まず人が自分とは異なる存在であることを認め、一人ひとり違う人間であることを理解することから、学部のアイデンティティを築いていきましょうという呼びかけてきました。私自身も学生のみなさんをそのような存在として理解したいと思い、少しでもみなさんと接して、その声に耳を傾けたいと思いました。そして、“brown bag lunch”が利用できると思ったのです。



“Dean's Brown Bag”は、みなさんが集い、世間話をし、愚痴を言い、情報を交換し、人を知る場です。私もしっかりとみなさんの語りを聴きみなさんを理解したいと思います。そして、私の思いも聴いてもらいたいと思っています。是非多くのみなさんに参加してほしいと願っています。

(人間福祉学部長 芝野松次郎)

■ 諸行事 (各学科報告に掲載のものは省く)

講演会

- ◆大学主催講演会「次世代育成支援推進における大学と自治体との連携の意義～伊丹市との包括協定を受けて～」

日 時：2009年4月30日(木) 15:00～17:30

場 所：関西学院会館レセプションホール
(西宮上ヶ原キャンパス)

内 容：

・基調講演

テーマ：「子どもが育ちたい町づくりー声なき声の民主主義ー」

講 師：神野 直彦(本学人間福祉学部教授・総務省地方財政審議会会長)

・シンポジウム

テーマ：「次世代育成支援推進における大学と自治体との連携の意義～伊丹市との包括協定を受けて」

パネリスト：藤原 保幸氏(伊丹市長)
浅野 考平
(本学副学長・理工学部教授)
神野 直彦

- ◆社会福祉学科・立教大学 RARC 福祉プロジェクト共催企画「共生を考える集い」

全体のテーマ：「支援の障害学に向けて」

日 時：2009年11月28日(土) 13:30～17:00

場 所：G号館2階第5会議室

プログラム：

・講演

テーマ：「ノーマライゼーションと障害学ーノーマライゼーション再考ー」

講 師：河東田 博氏

(立教大学コミュニティ福祉学部教授)

討論者：杉野 昭博(本学人間福祉学部教授)

- ・シンポジウム「支援の障害学に向けてー支配と被支配のジレンマを超えてー」

シンポジスト：

麦倉 泰子氏(関東学院大学文学部准教授)

竹端 寛氏(山梨学院大学法学部准教授)

松岡 克尚(本学人間福祉学部准教授)

助言者：杉野 昭博(本学人間福祉学部教授)

コーディネータ：横須賀 俊司氏

(県立広島大学保健福祉学部准教授)

- ◆公開シンポジウム「切り拓く新たな社会福祉実践～若手社会福祉士の挑戦～」

日 時：2009年12月5日(土) 13:00～16:00

会 場：西宮上ヶ原キャンパス社会学部1号教室

内 容：

・第1部 基調講演

テーマ：「総合的かつ包括的な相談援助の展開～社会福祉士の新たなカリキュラムが意味するもの～」

講 師：岩間 伸之氏

(大阪市立大学大学院生活科学研究科准教授)

・第2部 パネルディスカッション

パネリスト：藤田 孝典氏

(NPO 法人ほっとポット代表・独立社会福祉士事務所ほっと代表)

荒木 澄玲氏

(住吉・御影あんしんすこやかセンター(地域包括支援センター)社会福祉士)

金澤 ますみ氏

(大阪府教育委員会スクールソーシャルワーカー)

コメンテーター：岩間 伸之氏(同上)

コーディネーター：川島 恵美

(本学人間福祉学部専任講師・実践教育支援室室長)

外国人留学生懇談会

母国を離れて日本で勉学に励む留学生の激励もかねて、次のとおり懇談会を実施しました。

①第1回

日 時：2009年6月23日(火) 18:30～20:30

場 所：関西学院会館 翼の間

②第2回

日 時：2009年10月20日(火) 18:50～20:50

場 所：関西学院会館 輝の間

■ 人間福祉学部研究会

2009年度は、次の通り4回の研究会を開催した。

第1回 2009年5月27日（水）

- ①テーマ：福祉・介護サービスと情報
—「サービス提供記録」活用の可能性—

発表者：生田 正幸 人間福祉学部教授

- ②テーマ：ポジショナリティ（positionality）
への問いかけ
—トラウマ概念の重層性と支援
の意味への模索を通じて—

発表者：池埜 聡 人間福祉学部准教授

第2回 2009年6月24日（水）

- ①テーマ：音声学から国際共働^{きょうどう}へ

発表者：福居 誠二 人間福祉学部教授

- ②テーマ：歴史研究とジェンダーの視点から
みる社会福祉：（社会）福祉
史と女性史の交錯地点にたつて

発表者：今井 小の実 人間福祉学部准教授

第3回 2009年10月28日（水）

- ①テーマ：一般高齢者のソーシャルネット
ワークの地域別特性に関する研究
—茅野市におけるインフォーマルケ
アとフォーマルケアの組み合わせ
に関する研究の一環として—

発表者：石川 久展 人間福祉学部教授

- ②テーマ：私の研究～これまでとこれから～

発表者：甲斐 知彦 人間福祉学部教授

第4回 2009年11月25日（水）

テーマ：福祉への財政学からのアプローチ

発表者：神野 直彦 人間福祉学部教授

なお、各教員の発表内容は次の通りである。

福祉・介護サービスと情報 —「サービス提供記録」活用の可能性—

生田 正幸

社会のICT化と情報化が急速に進む中、福祉・介護分野の対応は決して十分とは言えない。情報が、ヒト・モノ・カネに次ぐ第四の資源として重視され、福祉・介護サービスの利用と提供においても欠くことができない存在になっているにも関わらず、その役割に対する理解や活用は遅れがちである。社会福祉基礎構造改革にともなうサービス利用方式の大幅な転換や、福祉・介護・保健・医療など多分野・多職種の連携によるサービス提供など、情報の積極的な活用を必要とする状況はますます強まっており、活用のための方法と技術の開発が大きな課題となっている。

そこで、福祉・介護分野における情報のなかでも特に活用が期待される「記録」に着目し、サービスの向上と高度化に向けた活用方法の開発に取り組んでいる。対象としているのは、福祉・介護分野における記録の中心的な存在であるケース記録（相談援助記録・サービス提供記録）である。これらの記録は、サービスを提供（実施）した証拠であると同時に、利用者（対象者）の状態や問題状況を記録し生活の質の改善を図るための役割を担っているが、制度運営上の要求から「証拠としての記録」が重視される傾向にある。また「紙に手書き」という従来型の作成スタイルが依然として大きなウェイトを占めているため電子データ化されていない場合が多く、福祉・介護サービスの改善に向けた情報資源としての活用に大きな障壁となっている。

研究においては、記録の可能性を具体的に引き出し実践的に活用できる形で提示するため、パソコンなどICTを用いて作成されている高齢者介護施設の記録データを収集し、個々の記録を要介護度や自立度、認知症度などの属性情報と結び付けた上で、形態素解析の技術を用いて抽出した語

彙数のあり方や記録件数について分析、さらにテキストマイニングの技術を活用し自由記述方式で作成された記録文に含まれる語彙の出現状況などを分析することで、利用者の状態、利用者のニーズ、サービス提供の経緯、サービス提供の成果などについて把握できる手法の開発を進めている。

ポジショナリティ (positionality) への問いかけ—トラウマ概念の重層性と支援の意味への模索を通じて—

池 埜 聡

今回の研究会例会では、発表者自身の研究領域と、常に研究に横たわる「悩ましさ」の根源である「トラウマの重層性とポジショナリティ問題」について報告した。

研究領域として、阪神淡路大震災の支援者の「二次受傷」「代理受傷」研究、犯罪被害者支援を通じた被害者支援ソーシャルワーク研究、高齢化する在米被爆者を対象にしたトラウマ状況と長期的対処過程に関する研究、修復的愛着療法に関する臨床研究などが簡単に紹介された。

これら研究における対象者は、外傷性ストレスを受け、危機に直面した経験をもつ人々であり、「トラウマ」という概念から理論的説明がなされる場合が多い。一方、「トラウマ」とは極めて曖昧な概念であり、PTSD パラダイムだけではとらえられない重層的・複合的要因を包含している。ソーシャルワークの価値に根ざし、PTSD 症候論に終始する医学モデルから統合モデル (bio-psycho-social-spiritual model) への援用を求めようにも、ジェネラリスト養成中心の日本の社会福祉領域では、外傷性ストレスを受けた人々への具体的な援助論には結びつかないもどかしさがある。さらに、「トラウマ」「PTSD」「こころのケア」といった言葉に包含される被害者、精神病患者、社会的弱者のラベリングの問題なども考慮しなければならない。

研究者—研究対象者間の関係性は、痛みの共有のみならず支援的役割や政治性から解放されることはない。そのなかで、研究者としてのジレンマ、すなわち「トラウマの重層性を理解できるはずが

ない」「そもそも研究者は発話する権利があるのか」「研究が人を傷つけてはいないか」「研究プロセスによってその人のアイデンティティを形成してしまわないか」「研究者が被害者間を分断してしまわないか」「研究が支援者を分断してしまうことはないか」といった思いを常に抱きながら携わらねばならない。この困難さ、悩ましさをどう克服していけばいいのか。

少なくともトラウマ概念の曖昧さ、重層性、複合性を引き受けていくこと、支援者として、研究者としての立ち位置 (ポジショナリティー) のねじれ、矛盾、副作用から目を背けないで認めていくこと以外道はない。研究者の立ち位置に言及し、価値を対象者の well-being に据え、展開していくトラウマ研究のあり方について発信していく必要性を自戒を込めて報告した。

音声学から国際共働へ^{きょうどう}

福居 誠二

デンマーク (以下 DK) 語学から実験音声学に進み、英語、日本語、北欧語の発音教育に携わってきた。6年前から学生を対象に、ネパール (以下 Ne) における幼児教育支援、異文化交流と共働活動をすすめる教育プログラムを始めた。講演ではその間の経緯を紹介した。

68年大阪で DK 語を専攻、在学中現地で DK 語コースをとる。後に DK 政府奨学金を得てコペンハーゲン大へ入学、研究助手をしながら実験音声学を勉強。帰国後 DK 語音声の演習授業の傍ら学際的な実験音声学を文系の立場からすすめた。ただ経済基盤が弱く、副業で北欧衣料輸入、通訳、翻訳、また日本語や英語の教育にかかわる。

- 85年 聖和大学短期大学英語科講師に採用されるが95年の震災後短大経営危機が強まる。
- 02年 同学人文学部英米文化学科が子ども、心理、国際共働を3本柱にしたグローバル・コミュニケーション (略称G C) 学科に名称変更。
- 03年 国際共働ができると期待されたようで、人

員整理を回避しG C学科に配転。

03年夏 ラオスの私立大学、Ne の教育省、私立カトマンドゥ大、国立トリブバン大、その他の教育機関などを訪問。

04年 2週間の Ne 文化交流旅行を企画したが外務省の渡航情報（危険度）ひきあげにより大学主催を中止した。プログラムは自主的に実施した。滞在中に中東での Ne 人労働者12人拉致虐殺の報あり、反政府デモ、人材派遣事業所やイスラム教施設への破壊行動が発生、4日間外出禁止令が出るなど不測の事態もあったが、研修と交流を無事終了した。

05年 Ne 文化交流旅行の報告書をもとに国際共働と異文化理解教育活動紹介の年刊誌「せいわのセーワ」を創刊した。

05年 8月 Ne 文化交流調査旅行という名前で前年同様のプログラムを実施。

06年 8月 大学主催の Ne 文化交流旅行実施。聖和教員による幼児教育支援のセッションを加えた。

07年 2 - 3月 Ne で安全、衛生、交流先の適性などを調査。

07年 8月 大学主催 Ne 文化交流旅行、聖和幼稚園教諭による幼児教育支援トレーニングキャンプ（2日半）を並行して行う。

08年 8月 Ne 文化交流旅行を実施。

今後の見通し

この文化交流プログラムは関西学院大学との合併以降も継続するが、参加対象者は現聖和大学在學生（09年度の聖和大学教育学部と人文学部の2 - 4年生および短大2年生）に限る等の条件が付された。このままでは継続は不可能である。

歴史研究とジェンダーの視点からみる社会福祉：（社会）福祉史と女性史の交差点にたつて

今井小の実

具体的な報告に入る前に、なぜ社会福祉の分野で歴史研究なのか、研究者、教育者、ジェンダー福祉論担当者としての三つの立場から説明を行った。研究者としては将来の社会福祉の在り方を展望するには現在の立ち位置を知ることが重要であり、そのためには過去からどのような道を通り現在にたどりついたのか学ぶ必要があるということ、またソーシャルワーカーを養成する教員としては、クライアントの真の擁護者となるためには現在の制度、サービスが変えられるもの、あるいは新たに創設できるものという認識が必要不可欠であり、それは歴史教育によって培われるものであること、さらにジェンダーが文化的社会的に作られた性差であるならば、歴史研究からのアプローチはジェンダー福祉論の担当者としても適切であることを説明した。その上で自分の研究について、過去、現在、そして将来の課題にわけ報告した。博士論文を取得した過去の研究については大正時代の母性保護論争から昭和初期の母子保護法までの過程を女性運動の側から検証したこと、現在の研究については女性の社会進出と社会事業の展開の相互関係について婦人方面委員を媒介に行っており、その研究の一環で戦前ドイツ領で実施されたストラスブルク制度に注目していること、将来の課題については日本でも婦人方面委員の積極的な採用を行った山口県、ストラスブルク制度を応用したとされる京都府や名誉職と有給吏員を併用した兵庫県の同制度について検討していくことなどについて説明した。最後に今井の研究を福祉国家とジェンダーという視点から問い直してみると、過去の研究は女性の“差異”に、現在の研究は“平等”に着目した研究であると整理できることから、「差異（保護）か平等か」で揺れてきた女性学や女性史の領域にも貢献できるのではないかと抱負を語って報告を終えた。

一般高年者のソーシャルネットワークの地域別特性に関する研究
 一茅野市におけるインフォーマルケアとフォーマルケアの組み合わせに関する研究の一環として一

石川 久展

本研究の目的は、地域におけるフォーマルケアとインフォーマルケアの適切な組み合わせを考察する際の基礎データとなり得る一般高年者の社会関係の実態を把握すること、地域特性別に社会関係を分析し、地域により高年者の社会関係にどのような特徴があるのかを把握することの2つである。

調査対象者は、長野県茅野市（人口約5万6千人、高齢化率19.5%）在住の60歳以上74歳以下の一般中高年者（要介護度1から5を除く）1059名（層化2段無作為抽出法による）であり、2003年11月から12月にかけて訪問面接調査（一部留置）により調査を実施した。有効回答数は810名（回収率：76.5%）であった。

調査結果をまとめると、以下の5つのポイントがあげられる。

- ①茅野市全体としては、ソーシャルネットワークが豊かであるが、特に親戚ネットワークのサイズが充実している
- ②ネットワークでも交流頻度で見ると、友人や知人といった近隣ネットワークとの交流が盛んである
- ③地域特性別では、農村地域と旧住宅地域がそれ以外の地域より、ネットワークのサイズも交流も豊かである
- ④農村・住宅混合地域の場合、ネットワークが豊かではなく、ボランティア活用や地域活動もそれほどないので、インフォーマルケアには限界がある
- ⑤ただし、高年者のソーシャルネットワークのサイズについては、地域に関係なく、高年者のQOLと有意に関連している

これらの結果をもとに結論を整理すると、本研究によって、茅野市全体においては、インフォーマルケアのベースとなる人々のつながりや地域活動がある程度充実していることが把握できたが、

その一方では、ソーシャルネットワークには地域差があることが検証された。今後の課題としては、これらの地域特性を踏まえた上でのネットワーク拡充のためのアプローチを検討する必要があるということである。

最後に、今後の研究課題として、本研究は、現場との話し合いの中で試行的に「地域特性」を設定したが、地域特性についての明確な枠組みが必要である、ソーシャルネットワークについては、標準化された尺度が未だ未開発であり、今後は、ネットワークを測定する尺度の標準化が必要である、の2点があげられる。

私の研究

～これまでとこれから～

甲斐 知彦

【これまでの研究】

これまでの研究では、主に体育科学に現れる現象の動態評価を以下の常微分方程式（1）の解を用いて評価してきた。

$$\frac{du}{dt} = f(u), \quad t > 0, \quad f \in C(\Omega), \quad \dots\dots(1)$$

$\Omega \subset R^1$: 本報の議論を行うのに適切な範囲の open set
 $f'(k) = 0, \quad f''(k) < 0 \quad \dots\dots(*)$

すなわち、上記、常微分方程式で現象を評価することによって現象の法則を明らかにし、また、 (u_0, k, c) を特性数として利用することで各現象間の比較を行うことが可能である。さらに、北田氏の定理を用いれば、条件(*)のもとで大域解 $u(t)$ の値 k への収束速度に関して、次の評価

$$|e^{c|f'(k)|t} (u(t) - k)| < \infty \quad \dots\dots(**)$$

が成り立ち、本報で扱った方程式では、比例定数 c をもって、収束速度に関して現象の評価をすることも可能である。

具体的には、上記の方法を用いて行った研究には以下のものがあり、研究会当日には詳細を報告した。

- 1) 体操競技の技の波及過程に関する評価

2) 運動中の頭脳明晰度に関する評価

【現在の研究、そして、これから】

現在は、主に野外教育について研究を進めており、特に野外活動の安全に関して研究を行っている。なかでも、リスクマネジメントの傾向分析では、指導経験によるリスク知覚に関する研究では、初心者及び経験の豊富なものほどリスク知覚を低く行う傾向を報告し、その結果の現場への応用を進めている。

野外活動の安全に関する研究は、この分野では必ずしも多くなく、その成果の現場への還元が期待される分野である。今夏も多くに事件、事故が野外活動中に発生している。これからもこの分野の研究を重ね、現場への還元を行っていきたいと考えている。

福祉への財政学からのアプローチ

神野 直彦

科学の欠陥は、分析対象を限定し、全体真実に迫ろうとしないことにある。真理に迫ろうとすれば、部分と部分とを関連づけて、全体像を常に意識している必要がある。

19世紀後半に誕生した財政学では、政治、経済、社会という三つのサブシステムから、トータル・システムとしての社会全体が構成されていると把握する。こうした財政学の分析視点から、社会福祉にアプローチを試みると、政府を中央政府、地方政府、社会保障基金という三つの政府に体系だてて、社会保障を有機的に関連づける体系として分析することが可能となる。

財政学では政府が共同体の限界を克服するために生ずると考える。生活の「場」と生産の「場」が分離してしまう市場社会では、教会などをシンボルに、生活の「場」における共同体の協力の限界を克服するために、地方政府が生成する。したがって、生活の「場」において相互扶助で提供されていた福祉・医療・教育という対人社会サービスを、地方政府が供給することになる。

社会保障基金政府とは生産の「場」における共同体的協力の限界を克服するために生まれたと考

える。つまり、失業、疾病、高齢などという正当な理由で賃金を喪失した時に、労働組合などの共済活動として実施していた賃金保障を、政府が代替して給付するようになったものと位置づける。

中央政府はこの二つのミニマムを保障する。一つは地方政府の相互扶助代替のサービス給付と、社会保障基金の賃金代替の現金給付のミニマムを保障する。もう一つは生活保障や児童手当など現金給付による生活のミニマム保障を果すことである。

このように政府体系を三つの政府に再編することは、現金給付とサービス給付とセットで、国民の生活を保障することを意味する。福祉国家とは現金給付による所得再分配で、国民の生活を保障する国家だったということができる。

しかし、重化学工業を中心とする工業社会から、サービス産業や知識集約産業というソフトな産業を基盤とする知識社会へと転換していくと、福祉国家は行き詰る。女性の労働市場への参加が増加し、家族やコミュニティという共同体機能が、急激に縮小するからである。そのため所得再分配政府という福祉国家の限界を、現金給付とサービス給付とセットで生活保障をする三つの政府体系へと再創造する必要がある。

